



日本記者クラブ
シリーズ企画「戦後 70 年 語る・問う」③

「戦後」の意味を考え続ける

加藤典洋 文芸評論家・早稲田大学名誉教授

2014年11月7日

デビュー作『アメリカの影』（1985年）から論壇の「事件」となった『敗戦後論』（1998年）を経て近著『人類が永遠に続くのでないとしたら』（2014年）まで一。常に戦後がもたらしたものについて考え、戦後を生きることの意味を問い続けてきた加藤典洋さん。著作を振り返りながら、これまで考えてきたことを、まとめて語ってもらった。「過去との関係をつくりあげないと未来をしっかりと築けない」。「しっかり敗れる」ことから「謝ることのできる強さ」を得よう。原爆投下について日本政府は一度はきちんと抗議しておくことが必要だ。加藤さんはそう訴える。さまざまな「ねじれ」が残ったままの戦後70年。その「ねじれ」を一つ一つ、まっすぐに伸ばしていくことが、これからもわれわれに課され続けていく課題だ。加藤さんの講演で、あらためてそれを知らされた。（会田）

司会：会田弘継 日本記者クラブ企画委員長（共同通信社特別編集委員）

日本記者クラブ Youtube チャンネル
<https://www.youtube.com/watch?v=LUD111wZZLo>

©公益社団法人 日本記者クラブ

**司会：会田弘継・日本記者クラブ企画委員長
（共同通信社特別編集委員 「戦後70年」、そのシリーズの第3回目として、文芸評論家の加藤典洋（のりひろ）さん——典洋（てんよう）さんと言ったほうが通るのかもかもしれませんが——をお迎えしています。**

皆さんご存じのとおり、加藤さんの最初の大きな作品は、80年代の『アメリカの影』でした。それから97年に『敗戦後論』。これは日本の論壇に大きな旋風を巻き起こしたのではないかと思います。最近では、『人類が永遠に続くのではないとしたら』。これはすごく難しい本なのですが、もう4刷りというか、大変好評な本ということで、書評も各紙に取り上げられました。加藤さんの最近の代表的な作品になると思います。

まさに『アメリカの影』から始まって『敗戦後論』、それからこの作品にも、われわれが生きてきた戦後というものをどう考えたらいいのか、極めて大きな、あるいは深い問いかけをしてきていると思います。

加藤さんのお書きになるものは、本当に、大変難しい。『敗戦後論』もやさしく書かれているようで難しい。あそこで「ねじれ」というキーワードがあって、前にお話を伺ったことがあるのですが、私の理解はどうもたくさん間違っているところがあったと分かりました。今回また直接お話を聞くとまたよく分かるころがあると期待しています。きょうは、少し大げさに言うと、いま最も深く戦後という問題を考えている日本の知識人、加藤さん自身から、加藤さんの思想の説明をしていただける機会を得て、大変うれしく思っています。

無条件降伏・原爆の絶対性

加藤典洋・文芸評論家 今日は、こういう場所にお呼びいただいて非常に光栄です。

一応、戦後という問題をかなり長い時間にわたって考えてきた人間の一人に数えてもらえるかと思いますが、標題は「70年目の戦後問題」。ちょっと羊頭狗肉の感がありますが、戦後が私にとって、またわれわれにとって、どん

な問題であり続けてきたのかについて述べさせていただきます。

「敗戦後論」という評論を94年の後半に書きましてそれが「群像」という雑誌の95年の1月号に出ました。その後3~4年の間に大体延べにして200人くらいの人から批判、批評を受けたと思います。中で、30人くらいが評価。ですから170対30くらいの比率で、まあ、四面楚歌のような状況におかれまして。

「戦後後論」「語り口の問題」という論考を加え、『敗戦後論』として刊行したのが97年です。なぜそういうものを書いたか。そこで何を論じ、その後どのような問題意識を持ってきたか。現在、戦後問題をどう考えているか。『敗戦後論』前史と『敗戦後論』、そしてそれ以後現在までと3つに分けてお話をします。全体としては、自分にとって戦後というのはどういう問題であったか、また現在あり続けているか、という話になるかと思います。

はじめに前史です。

「アメリカの影」という論を82年に書き、その後84年の「戦後再見——天皇・原爆・無条件降伏」を加え、85年に単行本『アメリカの影』を上梓しました。これが私の最初の本です。私は1948年に生まれ、66年に大学に入り、2年留年して、72年に卒業しました。大学に残ることはできず、なんとか国会図書館に拾ってもらいました。

その後、そこからの派遣という形でカナダのフランス語系大学の東アジア図書館の創設期の仕事に携わり、約3年半、カナダのケベック州のモントリオールに暮らしました。気分としては日本社会から姿をくらましたい、外の世界を見てみたいということで、3年半の間一度も日本には帰りませんでした。ちょうどこれが78年から82年。文学で言うと村上春樹、高橋源一郎、あと田中康夫、そういう人たちが登場した時期にあたります。

ではカナダで何をしていたか。北米、ヨーロッパなどを旅行し、吉本隆明や大岡昇平といった日本の戦後の著者の作品に親しみ、雪にまみれて暮らしましたが、またとない幸運として、

80年の秋から81年の春にかけて鶴見俊輔さんが隣の大学で二学期間にわたり客員教授として授業をしました。戦時期と戦後の日本についての講義を贗学生として受け、その人となりに接して実に人生を「なめてはいけない」ということを学びました。

それまで学生時代、ほぼ最後の4年間は授業にも出ずに全共闘運動のもとで石などを投げていたわけです。もっぱら戦後民主主義批判みたいなことを考えていました。就職をしたのが連合赤軍事件のあった72年です。要は大学院を落ちたのですが、気分としては大学からそのまま放逐される形となり、閉塞感が強かった。その後6年間くらい図書館内で単純労働に従事しましたが、そういうもろもろから一旦離れたいという気持ちが強まり、カナダに行った。そこで初めて戦後という新しい問題に、その担い手の等身大の姿にふれて、自分として向かいあったということだったろうと思います。

こうしたことが、いま考えると、自分にとって戦後というものが帰国後、新しい視点で見えてきたことの背景になっていると思います。

前史として意味をもつのは、『アメリカの影』に収められた3つの論のうち、最後の「戦後再見」です。入り口をなしたのは78年の無条件降伏論争です。江藤淳が45年の日本のポツダム宣言受諾は無条件降伏ではなかったと言い、これに本多秋五が無条件降伏に決まっているのではないかと反論をして始まりました。でも私から見ると、両者ともに物足りなかった。日本のポツダム宣言受諾が無条件降伏であろうとなかろうと、そもそも無条件降伏という政策思想が、近代の民主主義思想からいっておかしいと言わなければならないか。そう思えたのです。そこで私は、この政策思想を発案者のルーズベルトはどこからもってきたのかと問い、その淵源に原子爆弾の世界史への登場ということがあったのではないかという仮説に辿りつきました。

当時、国会図書館の調査局で海外新聞の翻訳の仕事に従事していました。夜、部屋に残って書庫に入り、数十冊の本を閲覧するというを一、二カ月続けると外部の学者の一年間の調

査量くらいになるのです。色々調べているうちにルーズベルト大統領のもとにはじめて原爆開発に道が開けたという知らせが入った時、彼はどういうことを考えたのだろう、という問いが浮かびました。私は文学の徒ですから、人類がはじめて核の可能性にふれ、原爆の製造可能性を手にしたとき、人はどう動くものかという好奇心を覚えたのです。

調べた結果は興味深いもので、シカゴ大学で核分裂連鎖反応が初めて成立したのは42年の12月2日の午前のこと。電話を受けたルーズベルトはその日のうちにチャーチルに書簡を書きます。それまでさんざんしぶっていた両国の首脳会議開催の要請に応じる、と返事したのです。それが約50日後に実現するカサブランカ会議で、43年1月24日、会議終了日の記者会見で突如、われわれは無条件降伏を枢軸国に求めることにした、とチャーチルにも相談せず、口をすべらせた、という周到な擬装のもと、ルーズベルトの口からこの政策思想が発表されることとなります。

これが実は周到に準備された擬装だったことが、いまでは米国の国務省文書から明らかです。両国首脳の手紙のやりとりもいま公開されている秘密書簡集から詳細にたどれます。むしろアメリカはそんなことは認めていませんので、このような主張を行っているのは世界で門外漢である私一人だろうと思います。でも、敗戦国からこういう説が出てくるのは、そんなに悪いことでもないだろうと思っています。

未曾有の万能の兵器を手に入れたときに、米国大統領は何を考えたか。当然、原子爆弾は戦闘員、非戦闘員を無差別に殺戮しますから、毒ガス兵器同様、国際法違反です。でもこれを国際法違反に問われることなく使用できる唯一の方法があります。それが無条件降伏です。この政策を彼は手に入れたハードウェアを使用可能にするソフトウェアとして、考案したのではなかったか。それが私の手にした仮説でした。

「戦後再見」といタイトルには、中国語の「戦後、さようなら」と、この字をそのままに読んでの「戦後再検討」の両方の意味をかけています。原爆の絶対性、万能性が無条件降伏という

非民主主義的な、非近代的な絶対的政策を生み出したのだが、この威力がまた、日本において天皇という絶対的権威を打ち砕くことにもなった。そういう主張をそこで行いました。

戦後というものを、一度日本の枠を離れ、世界史の場所から見直すことが必要ではないか、というのが私の戦後論の最初のメッセージでした。

社会契約のアポリアと市民宗教

その後、これが本になった直後ぐらいだったでしょうか。朝日新聞で戦後40年目の座談会があり、井上ひさしさん、西部邁さん、干刈あがたさんと日の丸・君が代などをめぐって話し合いをしたとき、私は、「戦後にはいったん死んでもらったほうがよい、そうでないと戦後が世代間に継受されない」という意味の発言をしています。

何を言おうとしたかという、戦争を経験している人は、戦争体験をどう伝えるかということだけをずうっと問題にしてきた。しかしどう伝えるかでは、先がない。伝え手はだんだん年を取り、いなくなってしまう。だから、どう伝えるかというのはこれからはテーマにならないのだということです。つまりこれからはむしろどう受け取るかということが問いの形になる。要するに世代間でバトンタッチされるべきなのはまず、バトンの中身というより、体験継受のイニシアチブなのだということです。「伝える」から「受けとる」へと主体をバトンタッチする。そのためには、一回、バトンを土の上においてもらわないといけない。伝えようという意思に、一回死んでももらわないといけない。紙面には、「一粒の麦もし死なずば一粒のままにてあらん、死なば多くの実を結ぶべし」とも言うでしょう、というようなことを私は述べています。

戦後というのがいまや第二世代であるわれわれの問題なのだということ。そこに新たな脱構築がなければ、戦争体験、戦後体験の継受は縮小再生産されるしかなくなるだろうという見通しを述べたのです。

これが私の中では『敗戦後論』の前史です。この先に『敗戦後論』の主張が出てくるのですが、このときに考えていたことを、いまなら次のように整理できるのではないかと考えています。

一言でいうとこれは第二世代にとっての戦後論とはどのように可能かという問題です。その課題の原型を『社会契約論』のアポリアのうちに見ることができます。ルソーの『社会契約論』は、そこにいる同意者全員で、一般意志を確認し、そのもとで全権をその一般意志に集約して社会契約を行い、社会をつくり、国家創設にいたるという話になっています。でもそこには重大な難点がある。社会契約の世代間継受をどう保障するかという問題です。つまり、社会契約の当事者である第一世代が死んだ後、その子供の世代が「えっ、俺は知らねえよ。おやじたちは何かやったのかもかもしれないけど、そんな一般意志なんて知らないし、社会契約も知らない」と言ったらどうするか。『社会契約論』は一般意志への合意、社会契約をどう次の世代へと生き延びさせていくのか。

実は、この問いにルソーはしっかりとぶつかっています。「ジュネーブ草稿」と呼ばれる草稿を読むとその問題が出てきます。でもそれはルソーにもうまく解けなかったのでしょうか。私が考えるにはルソーは、その答えとして、市民宗教を考えています。それが脈絡なしに、ぽつんと『社会契約論』の最後に載っています。これはいわゆる宗教とは違う、新奇な国家宗教の一種ですね。宗教社会学のロバート・ベラーは『アメリカにおける市民宗教』という出色の論文をベトナム戦争のときに書いて、歴代の米大統領の就任演説をそこで分析しているのですが、歴代大統領がひとしなみに言及しているキリスト教というものが何か、プロテスタントかカトリックか長老派か、と問うて、それはそういうものではない、そのメタレベルに位置するどこにもない汎「キリスト教」である、要するに宗教ではないのだ、ルソーの言う国家宗教というか、市民宗教、civil religion なのだと述べています。実体はアメリカン・ウェイ・オブ・ライフのようなもので、——ベラーは日本

研究者でもあるので——実はこれに一番似ているのは日本の国家神道だろうと書いているのです。State Shinto と。

このときにルソーが考えた答えは、似非宗教であって、その本質は一つの国家を最初につくったときの意思を継続させて、生き延びさせていくための国家宗教の一種、ルソーというところの「市民宗教」でした。ルソーには、これ以上のことは考えられなかった。でもやっぱりこれはまずいなと思ったのでしょう。ジュネーブ草稿にあった問い自身を『社会契約論』では全部抜き取っています。この問題ではルソーほど深く考える人はいないわけですから、答えがどうもやばいというので、その問いをとってしまっているのです。その結果、誰も気がつかない(笑)。ではなぜまずいと思ったか。それではだんだん縮小再生産しかされないからです。つまり、こういう似非宗教には、本物の宗教にはある世代間継受のダイナミクスがない。ただ上の人の言うことを、優等生がそれを聞いてまた伝えていくという一方向性しかない。反逆者が教義を壊し、一種の脱構築をくぐってより深く拡大再生産させていく激動に耐えられない。ちょっと弱いなとルソーは思ったに違いないのです。

でも、それと同じ問題に日本の戦後もぶつからざるを得ないのではないか。その課題に、戦前型の国家神道でも、ルソーの市民宗教的な戦後民主主義万歳という優等生教育でもない、よりダイナミックで、拡大再生産となる形で答えるには、どう戦後について考えるのがよいのか。

そのばあい、戦争を経験しない、しかし、戦後は経験している第二世代が、その戦後の経験の中から、自分たちの戦後論を作り出せなければ、戦後が作りだした一般意志ともいべき戦後的な諸価値、考え方、思想の世代間継受は、なされないことになる。戦後はやがて目減りして、枯渇するしかなくなるだろう。こういうことが、私の場合、『敗戦後論』を考えさせる動機となったと、いまならいえるのではないかと思うのです。

九条を選び直す

これに加えて、もう一つの前史として91年の湾岸戦争反戦署名の文学者の運動というものがありました。このときには、主にポストモダン系の文芸評論家や作家たちが集まり、自分たちは憲法九条の「戦争の放棄」の理念に立つがゆえに湾岸戦争への加担に反対するという主張を行ったのですが、これに私は反対をしました。ほとんど同年代でただ一人、とはいわないまでもごくごく少数の反対ではなかったかと思います。これを批判するために「これは批評ではない」という一〇〇枚ほどの文章を書き、「群像」に発表したのです。

反対の理由は、そこでの主張がこれまでのわれわれの、ということは第二世代の第一世代への批判をすべてなくしにするものだったからです。冒頭に言ったように、私は学生の頃から、第一世代の戦後の考え方には弱さがあると思い、これを批判してきました。戦後民主主義批判とその批判は呼ばれています。たとえばなぜ憲法九条を批判するのか。その内容に問題があるのではありません。内容がよいからこそ、その持ち出し方が間違っているというのです。憲法九条の内容はよい。しかしよいだけに、それをわれわれ自身がわれわれの力で作りあげ、勝ちとったものではないことを謙虚に受けとめ、それを何らかの形で改めて「われわれのもの」にすべく対策を講じるべきだ。この批判は、こういう代案の提示でもありました。平和条項を作りだす意思と権力の所在に言及しない理念だけの強調は、欺瞞につながる、という批判だったのです。

ところが今回の文学者たちの反戦署名運動の主張は、こうした第二世代の主張からまったく後退し、第一世代の主張をさらに理念化し、こけおどしの形にして、この理念の先見性を記者会見の場で、事情にうとい外国人特派員たちを前に強調するというものでした。実は日本には憲法九条という立派なものがある、これは二度の世界戦争を経験した西洋人の祈念を書き込んだものだ、という立派な説明がなされた一方、それが占領軍によって作られ、贈与されたものであるという点は、あいまいにされました。

第一世代の悪習が、そのまま次の世代によって踏襲されたのでした。

私は、『敗戦後論』で、国民投票でも何でもよいが——そこにはいまなら憲法改正への反対を通して、という手段も入るでしょう——自らそれに関与することで、憲法九条を選び直すことが必要、という主張を行っていますが、それはこの湾岸戦争の反戦署名運動に対する私からの対案です。憲法はよい。でもそれが自分たちの力で選ばれたものでないため、法の感覚、政治の感覚というものが日本では生きて形で人民のものとなっていません。法の感覚の回復に向け、「選び直し」ということを提唱したつもりでした。

この運動を批判したことで、その後3年間くらいは文芸雑誌の世界から関東所払い的なページを受け、その間、文芸誌から遠ざかりました。その後、再復帰して書いたのが、95年1月号の「敗戦後論」という論考だったのです。

戦死者をどう弔ったらいいのか

『敗戦後論』でまず考えたのは、戦後の見直しをどこから行うかということでした。『アメリカの影』のとき、無条件降伏と原子爆弾の世界史への登場という観点を提示したのですが、では、『敗戦後論』ではどのようなことがいえているか。そういう形に流し込んで言うと、ここで新しく提示しているのが、初の世界戦争における生き残った者と戦争の死者とのこれまでにない関係という問題でした。

世界戦争というのは幾つかの国と幾つかの国のグループごとの戦いなんですね。その点でそれ以前の近代戦争とは違う。以前の戦争は基本的に一国と一国の間の戦いなので、その駆動因は国益です。その国の国益とほかの国の国益がぶつかる。たとえば領土紛争。そういう場合に、政治の延長として、戦争が起こります。これはクラウゼヴィッツが言う古典的な戦争の定義ですが、20世紀初頭までの近代戦争もその枠内にあります。このタイプの戦争では、そこで戦って死んだ人間は、その国のために死んだので、残された同胞は、その死者をそのまま、心置きなく弔うことができる。追悼することが

できるのです。

ところが、世界戦争というのは、いろんな国のグループ同士の戦いなので、駆動因はもはや国益ではないのですね。グループをまとめるものは何かというと、それぞれの国益の上位にあるメタレベルのイデオロギーなのです。そうすると、イデオロギーというものが重要になる。複数の国同士を結びつける文明観とか宗教とかイデオロギーとか、そこからもたらされるcause（大義）が、戦争を動かす理由となります。そのような新しいタイプの世界戦争が最も劇的な形であらわれたのがナチス、ファシズム陣営と自由主義陣営という形でぶつかり合った第二次世界大戦であり、それに続いてコミニズム対自由主義で戦われた東西冷戦にほかなりませんでした。

ですから、世界戦争の敗戦国がどういう問題を抱え込むか。彼らは敗れることで、イデオロギーとして敗れるわけです。そのイデオロギーを否定して、新しいイデオロギーに乗りかえていく。それにまた説得されて、それをまた自分なりに受け入れていく。あるいはそれを自分の信念として、なるほど、というふうに宗旨替えしていく。あるいは新しく学び直して、それで生きていく。

そうすると、その前に自分たちが存在していることの基盤をつくった戦前の死者というのは、前のあしきイデオロギー、あしき国策に沿って戦って死んだ死者になる。戦後に生き延びた人間と戦争で死んだ人間の関係は、対立します。しかしそのためにいまわれわれがいるのだし、また国は負けたが、国として続いているわけで、彼らはわれわれの同胞であり先人なので、彼らはやはりわれわれの恩人でもある。われわれはイデオロギー的にいまや対立した関係におかれるにもかかわらず彼らを哀悼する理由を持つのですね。そして対立を越えて哀悼しようとするれば、その関係は「ねじれ」たものとして現れざるをえないのです。そこでは、いままでの考え方に立つ限り、哀悼ができない。どう考えて、両者の関係を受け入れればいいのか答えがない。戦前の死んだ人の場所からみるなら、自分たちのほうが、ある意味、集団転向

してしまっている。裏切り者の立場にあるわけなのですから。

その「ねじれ」た問題をどういうふうに解くか。実は世界史的に言うと、世界戦争の中の敗戦というこの経験は、これまでにありませんでした。そして今後も、複数国家間の大規模な戦争が起こる場合は、イデオロギー、文明、宗教間の戦争となり、これが常態となるだろうという意味では、世界史的にあって先駆的で普遍的な経験だったといつてよい。東西冷戦のイデオロギー対立の次に現れたのは欧米がモスレムを異端視する文明間の対立でした。ですから日本の「ねじれた」敗戦経験は、その最初の先駆的な例なのです。ですから、これにぶつかり、われわれがすぐに答えを出せなかったことには理由があるし、普遍性がある。そうである以上、この最初の困難に、戦後の日本人は、やはりしっかり向き合って答える必要があったのです。

ところが、第一世代の戦後論は、その問題の重大さに気づいていない。それで、「臭いものに蓋」ではないですが、戦争の死者との関係にはふれないまま、いわば彼らを日陰者にする形で彼らの代わりに自分たちが他国への謝罪を行うことで、他国への関係を修復しようとした。でもこのあり方は二つの意味で間違っていました。第一に、そのようなトカゲのしっぽ切りのような、死者をないがしろにした歴史意識で行われる謝罪を、相手はまっとうなものとして受けとれるのか、ということ、第二に、それでは戦争で死んだ人間とわれわれの関係をどうなるか、という問題が答えられずに捨て置かれてしまう、ということです。

そこから、戦争の死者との関係をしっかりと作りあげた上で、他国の死者への謝罪を行うというあり方をどう作りあげることができるか、という問題意識が、第二世代の戦後論の中核として、『敗戦後論』の中に入ってくるようになりました。

そこで私が行った提言が、後に述べる、300万人の自国の死者に向かいあい、哀悼することの延長線上で、2000万人の他国の死者を前に、彼らに謝罪するというあり方を作りだすとい

うものでした。そうでないと、私たちには地に着いた死者への哀悼も、謝罪もできないだろうと述べたのです。私が日本の戦後に生き残った者と戦争の死者との関係の「ねじれ」と呼んだのは、このことでした。

あともう一つ、この戦争が新しくもった性格には、総力戦ということがあります。戦場と銃後との差がなくなり、兵士と民間人の差もなくなりました。そこから、あたらしくゲリラ戦というあり方も生まれてきました。南京虐殺とか、マニラの虐殺とか、この戦争ではいろんな民間人殺戮の問題が起こってきますが、そこにもこの問題が関わっています。つまり、古典的な戦争は、例えば畑は絶対戦場にしないというところから始まっているわけです。中世の西欧の戦争などはそうでした。畑を戦場にすると、次の年はみんな餓死してしまうからです。これと相手のライフラインを根絶やしにしようという総力戦の戦争思想はまったく違っています。そういうところでは起こり得なかった問題として、ジェノサイドというような問題も起こってくる。兵士だけを祀る靖国神社の構えではこの新しい総力戦の死者に対応できない。戦没者という言葉が生まれるのも、そこに兵士と民間人の双方が含まれるようになるのも、日本の近代では第二次世界大戦の戦後がはじめてでしょう。このところ、東欧のコソボでとか、中東のシリアでとか、さまざまな問題が起こっています。そこで起こっている問題は、明らかに近代型の戦争から離れ、いったん世界戦争の枠組みのなかでそれ以前の秩序が全面崩壊したあとに出てきたものです。戦後論も当然、変わらなければならない。そういう認識を新しい戦後論として提出したいと思ったのです。

無責任体制の源流

「敗戦後論」では、具体的には、天皇の戦争責任と戦後責任、憲法の選び直し、いま申しあげた戦争の死者を弔う仕方ということについて、論じています。もういない昭和天皇の責任を云々して意味があるのか、憲法の選び直しなど改憲に道を開くだけではないのか、さらに自国の死者を先にするとは何ごとか、戦前と戦後

をつなぐという形で国民主体を立ち上げようとしているのではないか、等々の批判が多く現れました。

これらは私から見れば論全体のモチーフをつかみそこね、部分的提言をそこだけつまみ食いしてなされた誤解の上に立つ批判でしたが、冷静な言及は時がだいぶ経ってからしか現れませんでした。

時間がないのでここでは上の三つの主張について、簡単に述べてみます。まず天皇の問題。これは、昭和天皇の戦争責任というより、第二世代の観点からはその天皇を信奉するあり方、また責任を明らかにしないことの戦後責任がより重大だろうという主張でした。なぜ、戦後、昭和天皇は自らの道義的な責任を——いくらでも明らかにする機会と方法があったにもかかわらず——取らなかったのか、明らかにしなかったのか。そして国民はそのような天皇の存在を許したのか、それに抗議の意思表示をしなかったのかという問題です。退位という形も可能だったし、あと、そうではなくて、談話でも何でもいい。やはり「自分は日本の国民にも、あと他国の国民にも迷惑をかけたことについて責任を感じる」というようなことを一言、天皇が発言するというだけでもよかった。一九七五年には皆さんの仲間である中村康二という元毎日新聞の日本人ジャーナリストが敢然と戦争責任について天皇に質問も行っているのです。もし、天皇がそれに答えるような人格であったら戦後の行方は全然違っていただしよう。

日本の道義の根本として戦前は教育勅語というものがありません。日本の帝国臣民の道義の根幹が天皇という人格にもとめられていたのです。そういう存在が、何より責任を取らず、その後もそのことに口をつぐみ続けた。この場合、天皇の道義の問題というのは、扇子で言うと、その要を意味します。そのおおもとが外れてしまう。それが日本の戦後のほとんど現在に至る無責任体制、言いつばなし、しつばなしの一つの源流になっているのは明白だと思います。そうである以上、その流れに歯止めをかけるために、どのようにしてか昭和天皇の責任の

ありかを明らかにしなければならないというのが私の考えでした。

先に謝罪にふれましたが、もし昭和天皇が侵略した国々に対し「謝罪」の言葉を口にしていたなら、日本人にも責任をとること、謝罪するということがどういうことなのかをもっとはっきりとわかったでしょう。

これはジャーナリストの元共同通信の松尾文夫さんが著書に述べていることですが（『オバマ大統領がヒロシマに献花する日』）、例えばドイツの謝罪はどれぐらいやられているか。何度も何度もやられているわけですね。村山談話で言ったじゃないか。何遍謝ればすむんだ、などというところではないのです。さらに、謝るには、謝る人格がなければならない。謝罪には「顔」がなければならない。

ドイツの謝罪で名高いのはヴィリー・ブランドがワルシャワで思わず跪いて行ったというユダヤ人ゲッターの碑を前にした謝罪ですが、彼は実は私生児なんです。西ベルリンの市長から首相になる。そのとき、私生児だということで誹謗中傷を受けた。しかしこれに正面から受けて立ち、自分は私生児だ、それで苦勞してここまで来た、と言って逆に人望を得て、首相になった。彼はそういうしっかりと「顔」と「人格」をもった——つまり信念をもった——人間であることをその生き方で示してきた政治家なんです。ポーランドのワルシャワで跪いて謝罪したときも、ポーランドの政府要人の側は全然こういうことを予期もしてなかった。それで彼らのほうが困ってしまい、その翌日には報道管制が敷かれ、謝罪の記事が出なかったのです。それくらい、突如、個人の思いに突き動かされてこの挙に出ている。その後、ポーランドの新聞に出て、西ドイツ国内では、国辱ものだというので喧喧諤諤の論議、バッシングの嵐にさらされます。でも、その非難に対しても前言撤回しない。自分の謝罪の意思を守り通した。そこまでの経緯があって、この「謝罪」が成立しているわけです。

それだけの政治家がまずいなければならない。そしてそれだけの謝罪がなされなければならない。それが幾度か積み重なる。そしてよう

やく成立するのが一国が他国に行く「謝罪」だと思うのです。

天皇が国民に対しても、他国民に対しても、国際社会に対しても、結局戦争の責任を明らかにしなかった。そのことが、ある意味で昭和天皇の戦争責任以上の戦後に残した負の責任だと私は思っているのです。なぜ責任を取ることが大事か。それが政治の力の原点だからです。

次に、憲法の「選び直し」。これは、戦後憲法が悪い憲法だったら話は簡単だったのです。われわれが占領終了後、これを換えればそれで済んだ。ところが与えられた憲法が非常によい憲法だったのです。悪い憲法なら変えることで我がものになるのですが、よい憲法だと、それを我がものにする機会が思いあたらない。そこにやはり世界戦争の敗戦から来た「ねじれ」が顔を見せているのです。価値観の転換がなければ、自民党流の「自主憲法の成立」で済んだでしょう。でも、戦後はイデオロギーが変わり、人々がみなその新しいイデオロギーに説得された。民主主義ですね。その結果、与えられた憲法がそのまま、価値観を転換したわれわれに合致したわけです。そこから、これをそのまま自分のものとするために、「与えられた」という部分をここでも「臭いものに蓋」式に日陰者にする論理が、今度は護憲派のほうにまかり通るようになりました。その敗北の印を「原点のよごれ」として正面から受けとめて、これを「我がもの」すべく何らかの形で「選び直す」、そうすることで「法の感覚」を回復する。第二世代の課題はそこにあるだろうというのが私の憲法「選び直し」の提案でした。

あと、戦争の死者を弔うというのは、先ほど申しあげたような、戦争の死者との「ねじれた」関係という認識に立ち、自国の300万人の死者に向き合う、そして弔う。そういうあり方の延長線上で、2,000万人の他国の、侵略先の死者の謝罪へと進むという哀悼と謝罪のあり方を作りださないとこの問題は解けない。そういう論理を作りあげなければならぬという主張でした。

このときも、当時、いろいろな方面から批判を受けていたとき、ある大学の学長で、護憲運

動をやっておられる方から電話を受けたことがあります。「300万人の死者への哀悼と2,000万人の死者への謝罪というのを、前後関係ではなくて、ともにというふうには言えないのか。あなたがもしそれでもいいんだと言ってくれるなら、われわれはあなたの考えに合流し、賛成できるのだが」というようなことをいって、働きかけてくださった。でも私が「やっぱりそれはできません」と答えたので、落胆して電話を切られたというようなこともありました。

私としては、このようなしつかりと自国の死者への対し方を準備した謝罪でなければ、相手方にも信頼されないだろうし、国内的な反対主張を説得もできなければ押さえ込むこともできない。このままこの「浅い」戦後論と護憲論でいったら、その後、必ず「反動」がくるよ、もっと強い戦後論にならなければダメだ、という気持ちだったのですが、その主張は届きませんでした。そして社会は私の予期した通りに戦後価値の世代間継受に失敗し、縮小再生産される形で推移し、世論も大きく右にシフトし、現在にいたっています。以上が私の『敗戦後論』の主張と背景といったところかと思えます。

バビロン捕囚と日本の戦後

それで最後、現在の問題になるのですが、いま、これらの問題についてどう考えるか。現今の戦後問題とはどのようなものであり、戦後論の現在をどう考えるか。

もうすぐ戦後70年だということで、われわれ、驚くわけですね。2年前に、私は一度「戦後を終わらせるために」というような趣旨で毎日新聞にエッセーを書いたことがあります。そして去年は、安倍政権の国際的な孤立にふれ、『敗戦後論』の主張との関連で、朝日新聞でのインタビューに応じました。そこでの発言と重なる話になりますが、70年近くを経て、われわれはなお、まだ戦後は終わっていないと感じています。なぜ戦後は終わらないのか。また、戦後は終わっていないということの中身は何か。それが現在の戦後問題だろうと思えます。

前6世紀に起こった大々的な敗戦国民の戦勝国への取り込みの例にバビロン捕囚という

ものがあります。ユダヤ教が一民族宗教から世界宗教に変わった、その誕生のきっかけとなったできごととして名高いのですが、数年前、これについて調べていて、この捕囚が58年という短さだったことを知って衝撃を受けました。

数世代を経る中、バビロンに移された数万人のユダヤ人の中に何が起こるか。バビロニア化が起こるのです。名前がバビロン風に変わる。あと、もちろん宗教とか言葉とか服装などのほか、神殿とかもなくなりますから、文化も社会も全部変わります。家族関係とかも変わってくる。これに抗して、信仰を持ちこたえる中でユダヤ教が世界宗教へと鍛えられ、再生するのですが、この起死回生の民族的な根絶やしすれすれの経験というのが、58年間で、われわれの戦後は、すでにこれを超えているというのが、ショックだったのです。

戦後が終わらないとはどういうことか。日本社会は社会的に経済的に大きく戦後から変わりました。国内的な戦後はそこでとうに終わっています。終わっていないのは、先にあげた天皇の責任、憲法の問題、そして靖国の問題に顔を見せている戦争の死者との関係の問題くらいでしょう。でももっとはっきりした指標は、国際関係のほうです。対米関係での従属がいまなお終わらない。米軍基地は日本に居座ったままで、不平等な日米地位協定は改定の動きもありません。また全世界の米軍の在外基地の規模と負担で日本の位置は突出しています。東アジア隣国との関係でも、いまなお従軍慰安婦問題などで確固とした謝罪が行えないばかりに信頼関係の構築にいたっていない。いまや関係悪化のなかで日本は東アジアで孤立しているばかりか、国際社会のなかでも、どうも戦後秩序の一翼をしっかりと担うつもりがないのではないかと疑いの目を向けられ、孤立の度合いを深めている始末です。

これは本当に異常なことです。同じ敗戦国ながらドイツが、着々と戦後処理を進め、東西統一をなしとげ、ヨーロッパからそれぞれソ連とアメリカの力を排除してEUを作りあげる力の中核となり、完全に「戦後」を終わらせているのを見る時、この思いはさらに強まります。

なぜ日本はこうなのか。日本でだけ「戦後」が終わらないのか。そういう問題が現れてきているのです。ここにはいろんな問題が絡んでいるでしょうが、一番の問題は、やはり『敗戦後論』から続く問題で、日本はどうも第二次世界大戦の「敗北」を、保守派護憲派ともに、それぞれの仕方で、認めてこなかった。『敗戦後論』では「敗北」に向きあうことの必要を「原点のよごれ」、「ねじれ」といった言葉で述べたのですが、この「敗北」回避のあり方が、これまでのコーティングがはげて、原石の部分で国際社会にも露出しはじめた。国境紛争などがそうですし、いつまでも解決できない靖国問題、従軍慰安婦問題、北朝鮮との関係などもそうですね。こうした例をあげ、「敗北」を回避している限りは「反省」が生まれないのでその「敗北」は永続するしかない、と指摘したのが、最近の白井聡さんの『永続敗戦論』だったろうと思います。

ではどうするのがよいのか。

この背景に、平和主義に代表される戦後的な価値観と考え方の継承、その世代間の継受が縮小再生産の一途をたどり、三・一一の大災害後の社会の劣化に拍車をかけられる形で、いま枯渇に瀕しているという現実があります。第二世代の戦後論を作りあげなければという私のプロジェクトは、いまなお社会に受け入れられたとは言いがたいのですが、そうしているうちに、今度は第二世代の私がどう自分の「戦後」を後続世代に「伝えるのか」と問われているわけです。その責任を痛感します。

この先をどうするか。国際的にはドイツがその一つの例を示しているでしょう。90年代の、EU統合は、要するにドイツが敗戦国という自分の立場を生かして、敗戦国のドイツでなければできないことをした、その結果でした。敗戦国の日本が姿勢を正し、東アジア諸国の信頼を勝ちとり、新しくその一員として迎えられたら、その日本が起爆剤になって、いまや近代ではじめての非欧米圏での米国、EUに匹敵する東アジア圏が、対等で互恵的なゆるやかな協力圏へと動くのではないか。そしてそのことが日米関係をより非「従属」的なものへと打開する足場

となるのではないか。そして対米、対ロ、対東アジア(中国・韓国など)というオプションをすべて手にすることが経済的にも日本の苦境を助けるのではないか。

また国内で一つのヒントとなるのは沖縄です。沖縄では、最近の県知事選を含め、本土とまったく異なる風が吹いています。なぜ沖縄が違うのかといえば、沖縄では、日本の戦後の価値観、考え方の世代間継受がうまくいっているからです。それには基地負担体制が日米両国の総意として敷かれていることへの怒りに加え、東アジアの国際関係の激変、本土と沖縄の意識の違いの顕在化など、新しい要素が作用しています。しかし、何より、住民の4人に一人が沖縄戦で亡くなった。その戦争の死者を戦後、沖縄の人達が弔い続けてきたことの積み重ねが大きい。「敗北」を敗北として受けとめるには、戦前と戦後がつながっていないといけませんが、このあり方を本土の日本社会はまだ作られていない。どうすればこの課題に応えることができるかが問われていると思います。

ではそれに対していま、どんなことをすべきなのか。

若者たちに向け「戦後入門」

私の中での一つの反省は、いままで、プライドとか誇りとか、アイデンティティーという言葉は、少し弱い人が飛びつく概念で、あまりそういうものを前面に出して考えるということとはしたくなかった。自分の中で思想的な一種の禁じ手にしてきたが、それでよかったのだろうかということです。いま、自分は、そのことのしっぺ返しをくらっているのではないかとも思うのです。

戦後の経験というのは、例えば小津安二郎の映画の中に出てくる主人公がそうですが、一番深い形では、うつむき加減で語られる。そういう身ぶりのもっている強さなのです。敗者ですから、そういう話し方になるのです。

ですから、それは人に伝わりにくい。特にここにもおられるかもしれませんが、一本気な人々からは、じつに頼りないと思われれます。そ

れで従来、西欧近代主義に則った個人のドラマを全面に出す黒澤明の映画は世界的にも通用するだろうが、小津の映画のほうは敗者の想像力をもった国内では共感を呼ぶだろうが、世界には通用しないだろうと言われていたのです。小津のよさをわかる人間なんて外国にそんなにいないに違いないと。でも、そうではなかった。小津が黒澤を凌ぐ勢いで、いま世界に共感を呼んでいる。その共感の輪はなおも拡がる気配です。

きょう著者から送っていただいた本ですけれども(中村秀之氏)、50年代の占領下が終わった直後の日本映画の研究で、『敗者の身ぶり』というタイトルの著作があります。『敗者の身ぶり』が、ヨーロッパとか外国に行って受けるわけがないだろうと思われていた。それがすごく高く評価されている。それはなぜか。

よくしっかりと相手の目を見て話せ、なんて言われますね。外国の人間はそうしているぞ、と。でも多田道太郎さんがどこかでヨーロッパの小国の人などと話すと日本人と同じだ、目を半分ふせて、半分シャッターが閉まったシャッター街の雰囲気言葉を口にすると書いています。私は相手の目を見て話すという流儀はアメリカを代表とする列強、勝者の国のもので、世界でいうなら、少数の人間のあり方なんだろうと思います。敗者の身ぶりのほうが実は普遍的だ、そのことを、小津とか成瀬とか、いま多くの国で歓迎され、発見されつつある戦後の映画監督の作品は証明しているのではないかと思うのです。

で、後続世代の人、若い人々には、敗者の身ぶりがあるように、敗者の想像力があり、また、敗者の力、強さがあるということ、声を大にして言いたい。だからこそ、人が大きな人間になるためには、大人になるためには、負けること、一敗地にまみれること、完全に間違ふこと、そして心底から俺って本当にだめだと、心から反省することが不可欠なのだということを、真っ正面から述べる。そういうことが自分には必要なのではないかと、いま、考えています。

これは私の価値観、好みからいっても、外れている。敗者のみぶりを外れているので、小津

の主人公たちも、やらないでしょう。敗れることの強さ、そこから誇りやプライドが生まれうるのだ、そこから生まれるもののほうが、単純な誇りやプライドなどより、深く、強いのだ。伏し目がちに話す人は、そんなことは言いません。しかし、そこには矛盾があるのかもしれないが、第二世代の戦後論は、第一世代とは異なり、そういう胡散臭い矛盾を身に帯びなければ先に進めないのではなかったかといま、反省しているところなのです。

謝ることができる強さというものがあって、それはこういうものなんだ。そういうことも誇りであり、プライドであり、アイデンティティーになり得るんだ、ということ、を、気恥ずかしくて言わないで来た。しかし、それを撤回したいと思っています。

結局、私は、プライドなんて、弱い人たちにちょうどいい飴玉のようなものだと思ってきました。でもそういうなら、いま、弱いということ、バカにしてはいけません。いまの若い人というのは、まず弱い。そしていまの日本社会、あるいは世界全体のなかで、環境の改善に伴い、人間総体が打たれ弱くなってきている。弱いことの意味が、いわば普遍的なものに変わってきているのです。

そうなら、胡散臭い矛盾を抱えつつ、負けることって大事だ。間違いがあれば、それを認め、しっかり謝ることができるのが強さなんだ。プライドを作りたいなら負けを認めないことではなく、負けをしっかり受けとめることから作ろう。その方が正しい、ということも必要だろう。そのような本を後続世代に「伝える」ために書いてみたいと思っています。また、「敗北」を認めることに立つ戦後論をもう一度考えてみたいと思っています。前者のほうは、タイトルだけはもう決まっていて、「戦後入門」というのです(笑)。戦後は、いまや入門すべきものとなったということです。

ほかに戦後思想には、本当にいろんな人がいます。中野重治もいるし、吉本隆明もいるし、鮎川信夫もいるし、ほかに鶴見俊輔がいて、江藤淳がいます。そういういろんな人が培ってきた戦後思想の核心をもう少し若い人、そして国

外の読者に届くような形で提示したい。これらが、いまの自分の中にある後続世代にむけての働きかけのプランです。

関節外れだした近代

最後になりますが、三・一一の問題について考えていることをお話します。チェルノブイリが起こって5年でソ連は崩壊しました。私は、この5年を日本社会はどのように持ちこたえて進むか、この5年でどのように次への方向を見出すことができるかがカギだと思っています。戦後のことも、この5年くらいが一つのヤマ場になるでしょう。未来に向けた日本の方向を定める上でも、この5年が大事だと思っているのです。

これまで、ずうっと戦後のことを考えてきて、過去との関係をしっかりと上げることが未来の構想のためにも大事だと考えてきましたが、原発の事故があって、実は未来の問題、これから生まれてくる子供たちのことなどを考えてこなかった。未来から考えるということをしてこなかったことに気づきました。

しかし、過去とのつながりがしっかり取れないと未来の方向性を作り出せないのと同じく、未来の方向をどう定めるかという観点がないと、過去をどう終わらせるかということも考え尽くせないのではないかと今は考えています。これを「過去と未来の弁証法」というふうに自分では呼んでいます。実はご紹介にもあった『人類が永遠に続くのではないとしたら』という新刊で考えていることが、三・一一の原発災害を受けての考察です。このできごとを受けて、一步を踏み出すなら、という形で有限性という概念を足場に未来構想について考えています。

「もし資源、環境が有限だけでなく、産業、技術にも限界があるのなら」、そして「人類の叡智がこうした世界の有限性を乗り越えるだろうという信憑から離れた方がいまやしっかり現実に向きあうためのよいのなら」、「私たちはどのような生き方を、どのような価値観を、作りだすべきなのか」ところ、オビには書いています。そうすると、「することができる」力だけではなく、「することもしないこともで

きる」という新しい力の概念が生まれてくる。従来の成長観念とも反成長の考えとも異なる脱成長の概念が浮かんでくる。さらにやはり贈与ということが、新しい関係修復のカギとして浮かびあがってきます。

21世紀のいまの時代の、何が変わってきているか。一言で言うと、いろいろいままで近代をつくってきた関係の基本が全部ポツリポツリと関節が外れて壊れてきているということだと思います。経済もそうです。産業もそうです。で、それをもう一回修復し再生させるためには、誰かが一方的に贈与をしないとイケない。関係ができていたときには、フィフティ・フィフティという関係でやれるんですが、もう壊れちゃったら、誰かが一方的に贈与しないと、関係の創出はできない。こんなことがこの本の提言の内容となっています。

これを戦後の問題につなげて言うと、日本と米国、広くは国際社会の間に今後出てくるだろう一番の問題は原爆だと思います。日米間で原爆投下の問題というのを、取りあげたことはない。日本政府はまだ戦後一度も抗議していないのですね。でもこの異様な関係がそのまま未来永劫、続くとは思えません。これが戦後が終わらないことの核心にある問題だと思っています。

これは、最終的に私が言うことではありませんし、言えることでもないの、つまらないおとぎ話の一つの例として聞いてもらいたいのですが、これについて、こう考えています。今後日本は原爆投下をしっかりと抗議すべきである。これが一つ。ただ、抗議して、相手が応えないとしたら、その場合には、さらにそのことに抗議をした上で、一方的に相手を赦す、と声明するのがよい。これがもう一つです。自分たちは憲法九条というものがある。それを信奉している。したがって原爆投下に対しては報復の道義的権利を一方的に放棄する。そのことをもって世界に対する平和主義の意思表示とさせてもらおうと宣言するのです。

一方東アジアの隣国に対しては、しっかりと何度も、そして今後は「顔」の見える形で謝罪を行う。負債はしっかりと支払う。そのうえで一

方的に贈与し、新しい関係創出にコミットしていく。これが、いま私の頭にある日本の戦後がとるべき未来の方向性ということになるかと思っています。

ご静聴ありがとうございました。

<質疑応答>

司会 ありがとうございました。

いろいろと考えさせられる言葉がたくさん出てきたような気がいたします。

加藤さんの話を聞いていて、いつも思うんですけれども、書かれるものも本当に率直というか、まさにずばりと自分の気持ちをきちっと表現してくれている。そこが加藤さんがずうっと評価されているところだなという気が改めていたしました。なかなか一言で答えが出てこないような話がたくさんいまあったわけですが、これからわれわれと加藤さんと、対話ができたらと思います。

私から一つ、切り出していこうかと思っています。今度の新しい本のお話をちょっとお聞きしたいなと思っているんですが、これは頭のほうで書いてある、われわれ、どことなく近代というのはこのままずうっと必ず行くものだという想定がどこかであったんだなあという気がしています。加藤さんと、三、一の話の伺いながら、自分と意見が相当違うところがあって、でも、ふっとこの本が出て振り返ってみると、自分は近代というのはずうっと続く、このまま行くということをどこかで前提にしているところがある。加藤さんは違うフェーズへ向かっていくのかなと、この本を読んで私は思いました。

ただ、最後のお話のところを聞いてみると、「近代を支えたさまざまな関係の基礎が壊れている」とここにあります。それを修復していく「大きな踏み出しが必要」。これは、やっぱり加藤さんも近代を建て直していくということのかなと。また改めて思ったんですけれども、その辺、何か、ちょっとうまく表現できないんですが、いま加藤さんが考えている近代というか、われわれが来たものについて、いまだういうふうに、この本を通じて言おうとしてい

たことを……。

私の質問はあまりよくないかもしれないけれども。

加藤 いや当然、私はここで今後は有限性みたいなものを繰り返し入れて考えていかなければならない、つまり近代の考え方だけではもうだめですよ、というふうなことを書いていますから、従来の近代の考え方には反対の立場です。でもエコロジー思想の反成長、反近代の考え方でも近代は越えられないんだとも言っています。これまでの近代は無限性を信じる「無限性の近代」なんです、必要なのは人間のもつ無限性を取り入れた上で地球と世界の有限性にフィットする「有限性の近代」なんだという説です。でも、ここに述べているのも、新しいタイプのやはり近代です。人間の欲望と自由渇仰、近代の産業技術の根源である無限性をも繰り返し込んだ上で有限性に立つ思想。これが有限性の近代ということですが、こういう考え方を用意すれば、やがてこの方向しかないことが多くの人にわかってもらえるのではないかと。近代に即して言うなら、近代の成長という考え方を、さらに考え方を深め、思想的にも産業技術的にも成長させることで、従来の「成長」観念を内側から脱構築していこう、というものです。ですから近代を立て直す、というところはその理解でよいと思います。

質問 日本の戦後の一つの節目は、朝鮮戦争だと思うんですよ。ある人が、もう日本の産業はだめだということで、猛烈に悲観的になっていたのが、朝鮮戦争があって、わが企業はよみがえったと言っているんですよ。そういう他人の不幸というか、冷戦という背景があるにしても、他人の不幸で日本がよみがえったという戦後のスタート、これが日本人の曖昧さというか、問題を突き詰めて、問題の基本はどこにあるかということを見失わせたと思うんです。

あなたの感想なりコメントをお伺いしたい。

「ベシミ」とナマコの口

加藤 いまのお話、他人の不幸につけ入るような形で結局、産業復興の契機を手にした。そ

の不道徳性がその後、かなり大きな禍根を残したというご意見だと思います。それについては、私は、いまご質問された方ほどには重大に考えません。

というのは、人間は自分が非常に困ったときには、これは他人の不幸だから、ちょっとつけ入るのはやめておこうというふうに思いとどまる存在ではないと思います。少なくとも経済活動の上ではそうではないだろうと思うからです。そういうことは、やはり非常に好ましくないことかもしれないけれども、現実には起こるだろうと思うんですね。

ただ、だからといって、それでその人間が不道徳に染まるというものでもないだろうと思っています。復興した後、自分たちは復興したけれども、ちょっとやばいことがあったなという、そのことをどんなふうにその後自分の中に残していくか、考えていくかということが重要だと思います。そのことを倫理的にというか、その後の道義が失われたことの原因だと考えてしまうのは、ちょっと無理があるのかなという感じです。

質問 よく外国の専門家に日本の理念は何なのかと聞かれます。先ほどおっしゃった思想家の方などのいろんな本を読んでも、戦後70年間、私たちがつくってきた日本の理念は一体何なのだろうか。思想家の方は、先ほど憲法の話もありましたけれども、どういうふうに答えられるのか、何かお考えがあったら教えてください。

加藤 わかりました。これは先ほど申し上げた、外国人は相手の目をしっかり見てものを話すと言うけれども全部の外国人がそうなのではない、大国の外国人はそうだが小国の外国人は目を伏せて話すという、あの話に重なる話だと思うんです。いまお話にあった外国の専門家、学者というのは、たぶん大国の人だと思うんですね。われわれの国家理念とはこういうものだ。しかし日本を見ているとあいまいでよくわからない。いった日本の理念は何なんだというわけです。そこでこちら、オレ達の理念って何なんだろうと考える。そしてたとえば、平和主義だとか、和だとか、しまいには「おもてなし」

だとかとなるのですが、よく考えてみれば、われわれをささえているものは理念という形では、存在していない。ですから、そういうこともあるのでね、とちょっといなすくらいが、私のそういう大国の専門家に対する答え方になるのかもしれませんが。

もう少し言うと、われわれの理念はこうだ、君の理念はどうなんだ、という聞き方は、互いに対等というルールに則っているんだけど、そのルールは自分たち、聞く側が決めたものなんですね。そのことの非対称性にこういう大国の論者はおうおうにして気づいていません。そういうあなた方の作った対等のゲームに乗れないというところからわれわれの文化は始まっているんですよ、と私なら言うかもしれません。いや、これは本当にそうなんです。

それが、圧倒的に優位な外来文化に対して、日本の文化が古来取ってきた抵抗の仕方なんです。洗面をした「ベシミ」という能のお面は、そういう劣位者のミミクリ(模倣)による抵抗を体したものとされています。それが日本の漫才にいうツッコミとボケのボケの源流です。『古事記』にこういう話が出てきます。神の使いのアメノウズメノミコトが海の生き物を集めて、「新しく降臨されてきた神の子にお前達みんな、しっかりと仕えるか」と尋ねる。するとすべての魚が「はい」というなかで一人だけ答えない。「何でおまえは答えないんだ」と言うと、それはナマコなんです。ナマコが答えないでレジスタンスをしているんです。「この口や、答えせぬ口」といってアメノウズメはひもがたなでナマコの口を割いて切った。それでナマコにはいまも割けた口がある、というのです。それが日本の最古の書物に記された、圧倒的に優位な理念を前にしての劣位者、敗北者としての日本人の抵抗の原型なのです。

いま、よくオリエンタリズムとかコロニアリズムの専横とかそれへの抵抗などということが言われますが、これはもっと身近な問題だと思うんですね。オレ達の理念はアメリカン・ウェイ・オブ・ライフだ、君たちは何か、と訊かれて、何だろう、平和主義かな、と考える。ショー・ザ・フラッグと言われて、慌てて対応し

ようとする。しかし、そういうあり方への抵抗を、日本社会は生きてきて、戦後思想はその深い抵抗の流れをしっかりと継承してきた。先の『古事記』の話は折口信夫の日本の文学・芸能の起源に「沈黙(しじま)」があるという論に出てくる話ですし、これを抵抗として読みとっているのは鶴見俊輔、多田道太郎といった人々なんです。

私もね、どうしても答えろと言うなら、平和主義、平和感情みたいなことで答えるでしょう、平和主義かな、なんてね。そういうふうな答えになると思います。でも、その意味は、何か非常にふやけた、はっきりしないものを理念と言ってやるゾということだと思う。それはあいまいなものじゃないか、などと大国の男に言われたら、劣位者の反撃に出て、上のようなことを言うんじゃないかと思います。

質問 1970年生まれで、多分この中ではかなり若いほうだと思います。

加藤さん、第二世代という話をされて、まずは最初、戦後50年のころは、戦後の始まりをどう受け取るか。で、70年たつたいまは、それを、戦後の経験をどう伝えるかで、多分第三世代の問題というのが生じているんだと思います。

加藤さんの話を聞いていて私は2.5世代ぐらいだろうと思うのですが、加藤さんは「受け取る」とか、「伝える」とか、非常に積極的でいらっしゃる。そこに何か動機があるんだと思う。第三世代に伝えるとか受け取るとかに、動機があるかどうか。その加藤さんの動機、動かすものというのは何なんでしょう。例えば、加藤さんのご両親の戦争体験とか、何か個人的なものがあるんでしょうか。それが一つの質問です。

2つ目の質問で、最近、赤坂真理さんが精力的に戦後について語っていらっしゃる。多分次の世代の方だと思います。赤坂さんもちょうど1980年にアメリカに行かれていて、その体験を核にされていて、ちょうどいま加藤さんが78年から83年、カナダにいらっしゃっていた。

加藤 78年から82年ですね。

質問 それは、あの時代に何か意味があるのかということと、赤坂さんの最近の言論をどうみていらっしゃるかを教えていただけますか。

加藤 3つ、質問があったと思います。

最初に、戦後の問題にこだわるのには、何か理由があるのか。個人的な理由が必要かどうかということについては、大分疑問があるんですが、しかし、個人的な理由はあるかもしれませんね。ここでは申しあげませんが。

ただ、それでこういうことをやってきたということではないんですね。それが一つ。思想の問題が自分には戦後思想としてやってきた。文章を書くようになって、鶴見俊輔さん、吉本隆明さん、埴谷雄高さん、大岡昇平さん、江藤淳さん、大江健三郎さんといった年長の人々と大なり小なりのつきあいが生じ、個人的にも聲咳にふれる機会がありました。特に鶴見さんと吉本さん。そういうなかで、自分の考えを作ってきた。そういうことが大きかったと思います。この後になると、ポストモダン思想の洗礼を受けて、そこで思想というものを考えるようになった人が多くなるはずです。

次が、82年問題かな。それは、確かに赤坂さんの小説、『東京プリズン』を読むと、時期が同じだと思いますが、あの時期に何か意味があったというふうには、あまり感じません。

ただ、向こうに行って、はじめにベトナムのカンボジア侵攻をめぐる向こうの大学院生と意見がぶつかったのですが、アジアのことは当然、自分の方が詳しいと思っていたので、これはベトナムの帝国主義的行動だなどという大学院生に、何バカをいってるんだと、一喝してやるくらいの気持ちでこれを否定したんですね。でも、後で考えると、その学生が正しかった。彼が言っていたとおりだったんです。

この経験はすごいショックになりました。ちょうどそういう時間差というのが、日本と北米——しか知りませんが——の間にあった。そういう面白い時期だったということは言えるかもしれません。

あと、赤坂さんの『東京プリズン』です。あの作品は、非常に好評でしたね。私も信頼して

いる多くの人が高く評価しています。でも、私は小説として、どこがよいのかよくわからない。『敗戦後論』を書いたような場所から読んで、どこに一步の踏み込みがあるかわからないんです。あまり評価できずにいます。

質問 昔、「文明が文化を破壊する」という言葉を聞きました。戦後70年というのは、まさにその時代だと思います。日本の場合は、ほとんど日本の文化を否定されていますから、何も言えないでめちゃくちゃになったのではないかと思います。

そのために日本が誤解されたことがたくさんあります。これからはそれを直すためには、日本のよさというものを発見して、それを世界に訴えることを、どうぞ考えてください。お願いでございます。

戦後の「よさ」と「強さ」

加藤 その「よさ」というのが、いまおっしゃられた方が思っているようなよさと重なるかどうかわかりません。私は、日本が敗戦を経験したところに、日本の多くのよさのもとがあると思っているんですね。そのへん、戦前のよさと戦後のよさとを比べたら、私は、戦後のよさのほうが本当は強いよさで、それと、戦前から続くものが合体して、一つの強さになるというように考えています。

ここでは時間がないので、あまり言えませんが、例えば私は、三島由紀夫について、昭和天皇を最初に批判したのは——最初というか、もっとも深く批判したのは——この人だろうと思っているんです。それで「お前は右翼か」とも言われたりもするのですが、私の三島は完全に戦後的な価値を体現している人です。けっして右翼的価値の体現者ではない。それと同時に、そのことを国外の人に伝えるのは至難の業だろうとも思います。それくらい、私の言う日本のよさは、外に伝わりにくい形である。戦前から戦後に屈折しながら続いている。でも、そういう「よさ」をこそ伝えていきたい。いまのお言葉は承って、心に押さえておきたいと思いません。

質問 日本では「戦争は嫌で平和がいい」という議論が非常に多いんですね。戦争は反対で、平和がいいなんて、世界中誰でも思う当たり前のことです。侵略戦争と防衛戦争があると思う。巨大な国が攻めてきた場合、防衛する戦争は、これは是認せざるを得ないと思うのですが、ご意見はいかがですか。

加藤 侵略する戦争と防衛する戦争というのは、簡単にはなかなか区別がつかないところがあります。過去の日本軍が中国にやったとまったく同じような侵略を実際に自分の国に対してやられたら、私も当然何かをやるでしょう。行動を起こすでしょうけれど、論議されるだけの戦争の本質は、それがいずれか区別できないということなんじゃないでしょうか。まして高度テクノロジーを駆使した現代戦争では、古典的な侵略と防衛の区別の判定はいよいよ難しくなるというのが常識です。それをわざわざ、いまそういうことを区別するような形で戦争を論じることには、とにかく「よい戦争」への道を開くという動機を感じるんです。ですから、答えはノーです。

いまそうおっしゃる背景がわからないではないけれども、私は、戦争というのは、そこで人が死ぬでしょう。やっぱりそこから考えていかないとだめじゃないかと思うんですよ。自分の家族が死んでご覧なさい。そのとき、その戦争が防衛戦争か、侵略戦争かが問題になるか。むしろ国の戦争に、自分の家族を取られた、という区別の方が大きいでしょう。多分アメリカとかを考えると、正しい戦争だから納得のしようがあるよという、そういう考えはあるかもしれませんが。自由のための戦争とか、そう言う人がいるかもしれない。でも日本は310万人の死者を70年前に作りだした国ですからね。戦争は、やばいよ。これが戦後の日本人としての私の基本感情です。これと、敵がまったく理不尽に攻めてきたら、戦うよ、というのは私の中で両立します。でも、侵略戦争と防衛戦争に分けて、防衛戦争は是認する、とはなりません、私のばあい。

質問 「政治的未成熟」、レジュメに書いてありますが、それについてうかがいたい。無責

任体制と国債問題、2つ例を挙げられていますが、丸山眞男が「膨大なる無責任の体制」と言った、まさに責任を押しつけ合う、そういう体制、それはいまだに続いているということですね。この理由はなぜなのか、それをちょっと教えていただきたい。

1,000兆円超の国債問題も挙げられています。これについては、基本的には先送りされています。一方で、財務官僚とか、そのシンパの学者とかは、早く何とかしろということをしきりに言っている。そうすると、財務官僚やそのシンパたちは、責任感がある人たちで、そうじゃない人たちは無責任なのかどうなのか、ということですね。この辺はどういうふうに考えますか。

加藤 無責任体制、丸山眞男が指摘したようなものがいまだに貫徹されているとして、その理由は何かというお話について、丸山さんと別に、いま今日のお話から言うことですが、やはり個人の道義観みたいなものが強くない。あと、国民の力が弱くなって、政府、官僚が国民を操作対象と見るまでになってきた。その二つが大きいと思います。

ここで道義というのは、焦点深度の深い倫理のことです。身近な人への忠誠心、責任感がある人は多いかもしれないが、それが遠い人、社会の遠方に位置する人にも、等しく及ぶ、そういう深度をもった倫理をもつ人は少ないですね。この場合の後者の広い倫理をさしています。

たとえば江戸時代の侍などは、主君に対する忠誠と義務みたいなものではとても強いかもしれないけれども、例えばその脇で自分の家族は犠牲にする。あるいは、身分の違う町民は最初から度外視する、ということがあると思います。これは忠誠心ではあっても道義ではありません。一方、道義は近代的な倫理というのとも違います。もっと幅の広い、家族への愛とか身近な人への責任とかがそのまま社会への責任感と地続きになっているようなイメージなのですが、そういうものでないと、この無責任体制のメンバーが、内からこれを揺るがす力にはならないだろうと思うのです。「倫理」とは言わずに「道義」と言っているのはそういうつも

りです。そういう個人的な道義観が弱い。そのため、戦後これだけいろんな経験をしてきたのに、結局、また元の木阿弥になってしまった。

また、選挙への低い関心などもそうですが、国民、選挙民が弱くなった。電通・博報堂的な政府、官庁の情報操作で動かされる対象となってしまった。それも無責任体制の大きな補完物だと思います。

あと、国債云々の問題で、財務官僚が財政改善を考えるのは一義的には武士と同じで、一つは自分の仕事だから、それが財務省のためになるからですね。全員が全員、そうではないでしょうが、彼らの大半は、遠い存在である国家のため、国民のためにそうやっているわけではない。財務省への忠誠心だと思います。ですから、責任感というのを公僕としての責任感と理解するならそれは責任感があるということではない。財務省の人がとても責任感があって、ほかの人が責任がないということにはなりません。むしろこういう財務官僚の小文字の責任感が、大文字の無責任体制を作っているというべきではないでしょうか。

司会 加藤さん、ありがとうございました。

なかなか深くて難しい問題が多いので、ここでのやりとりではなかなか結論も出しようもない。でも、考えるよすがは、いろんなものをいただいたと思います。来年にかけて、戦後の問題を書くに当たって、きょう加藤さんからお話しいただいたことを思い出しながら書いていくことで、みんな何か深いものが書けるんじゃないかなという気がいたします。

これを機会に加藤さんとまたやりとりしていただくこともできるだろうと思います。

最後に、加藤さんからゲストブックに言葉をいただいています。「過去からの声と未来からの光に耳を澄まし、目を向けること」。きょういただいた話と随分通じるころがあって、未来に向かって何か残したいという話も、きちっとしたものを次の世代へ置いていきたい。そういう話もございました。いままでこのゲストブックに書かれたいろいろな言葉の中で、一番深みがある言葉をいただいたのではないかと思います。われわれに向けて書いていただいたような気もいたします。

(文責・編集部)